（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　王　俊文

武田泰淳（1912-76）は東京帝大文学部支那哲学支那文学科を退学後の 1934 年、竹内好らと共に「中国文学研究会」を設立、37 年には徴兵されて二年間を華中戦線で過ごし、43 年評論『司馬遷』を刊行、敗戦を上海で迎え、47 年「上海もの」の代表作「蝮のすえ」(1947) などによりデビュー、同年北海道大学法文学部助教授に就任するが翌年には退職帰京、以後は作家活動に専念して、代表的戦後派作家となった。本論文は泰淳の中国認識の中心的存在である魯迅(1881-1936)と、泰淳が魯迅から学んだ「阿Q」像に注目して、泰淳文学を考察する現代日中比較文学研究である。

第一章「「孤独なる人間」―武田泰淳と魯迅」は泰淳の魯迅観について総体的に考察し、作品「声なき男」（1954）と『秋風秋雨人を愁殺す　秋瑾女士伝』（1967-68）に表れた「孤独観」に焦点を当て、泰淳「声なき男／声をあげる女」の構図は、魯迅「阿Q／秋瑾」の系譜の変奏である点を考察した。第二章「武田泰淳における「阿Q」―「私」の分裂と浮遊」は、泰淳の初期小説「利口な野獣」（1948）と『風媒花』（1952）に現れる「Q」という記号および阿Qの影を分析し、泰淳文学における「私」の在り方を論じた。第三章「中国戦地を見つめる「喪家の狗」―武田泰淳の日中戦争体験と「風景」の創出」は、主に「詩をめぐる風景」（1949）、「廬州風景」（1947）、「美しき湖のほとり」（1952）の三作を取り上げ「風景」の創出という視点から、泰淳の日中戦争体験を考察した。第四章「「善人」・「悪人」及びその間―武田泰淳と敗戦前後の上海」は、泰淳の「善悪観」に焦点をあて、敗戦前後の上海を描いた「月光都市」（1948）と「Ｆ花園十九号」（1950-51）を分析した。第五章「方法としての「混血」―『上海の蛍』と『風媒花』を中心として」は、泰淳の上海体験から生まれた「混血」観を分析し、敗戦直前の上海生活を語る『上海の蛍』（1976）と、戦後中国に対する基本姿勢を総括する『風媒花』（1952）という二つの長篇小説を論じた。

第四章の「善悪方程式」と「強弱」の弁証法については更に詳細な分析が必要であり、第五章の多元性を広げる方法としての実存的「混血」論は更なる展開が可能であろう。

しかし本論文は泰淳独自の魯迅受容を解明し、泰淳文学において「私」の分裂と浮遊を担う「阿Q」の影を明晰に考察した点、文学的・人間的な立場からの「漢奸」に対する冷徹な泰淳の思索を分析した点、異国に生きる「祖国喪失者」をも内に含んだ泰淳の「混血」観が弱者／強者や無力者／権力者という対立を相対化し強靭な生き方を志向するための実存的な「方法」であったことを解明した点など、顕著な成果をあげている。このため本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。